連載：現代管情報シリーズ

J/J-Electronic KT66（中編）

都来往人

はじめに

先月号では英国を代表するビーム四極出力管：KT 66の生い立ちについて触れてみましたが，今回は近年に開発されたKT 66について触れてみたいと思います．

ところで，1980年代後半以降に生まれた球を本シリーズでは「現代管」と呼んでいますが，J/J-KT 66よりも前に発表されたKT 66タイプの現代管は，既に製造中止になったものまで含めると中国製で5種類，ロシア製で4種類もありますが，M-O. Valve（Marconi-Osram Valve：GEC）オリジナルを細部に至るまで忠実に再現したモデルは皆無でした．

例えば，ロシア製のKT 66（Sovtek-KT 66, Tung-Sol KT 66）はいずれも6L6GCをベースに独自の解釈を加えたユニークなモデルです．

これはKT 66がプレート損失・耐圧ともに6L6を上回るスペックを持った高規格かつ高性能な球（Epmax＝500 V，Eg 2 max＝400 V，Pp＝25 W ※1940年代の初期型）であることに由来しています．

KT 66の登場に刺激されて6L6（Epmax＝360 V，Eg 2 max＝270 V，Pp＝19 W）自体もパワー・アップが図られ，1959年にRCAが発表した6L6GCではKT 66を凌ぐスペックを達成しました．（Epmax＝500 V，Eg 2 max＝450 V，Pp＝35 W）このため，ロシアにおいては6L6GCを改造する手法が生まれたのではないかと思われます．

それに対して，外観的にも構造的にもオリジナルに非常によく似ている現行の中国製のKT 66は，オリジナルをコピーして誕生したモデルではありますが，仔細に観察してみると，部材の一部には独自の解釈が加えられています．その中国製のKT 66は最初からオリジナルをコピーして生まれた訳ではなく，当初はロシア製同様に6L6系の球を改造する手法で設計されました．

このように，現代管においてKT 66ほど各社独自の解釈が加えられたモデルは他にないと思います．今回はそれらユニークな各球の特徴をご紹介します．

近年に開発されたKT 66について

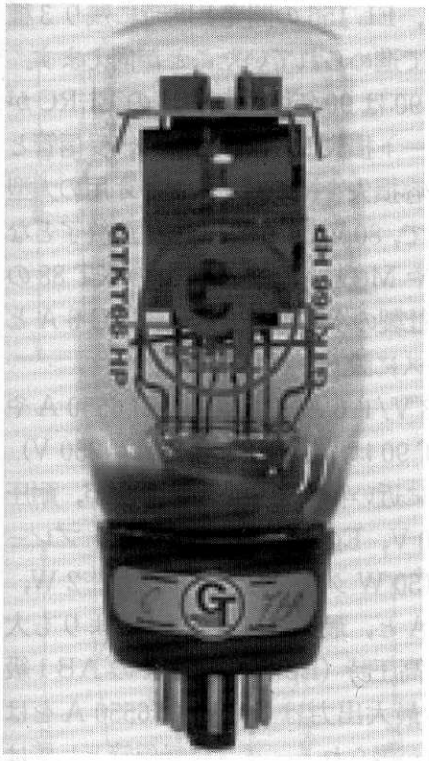
M-O. ValveやGE, Sylvaniaといった大手が真空管の製造を終結した数年後には早くもそれら著名なメーカーの6L6系の入手が困難になってきました．

それはとりもなおさず真空管を大量に消費する電子楽器分野での旺盛な需要によるものですが，特にKT 66はM-O. Valveだけが製造していたため絶対数量が限られており，急激に入手困難になりました．これは同社製のKT 77やKT 88も同様です．

そのため，80年代末以降，セット・メーカーの要求に応えるため，欧米の真空管商社はロシアや中国・東欧で操業中の各メーカーに対して代替品の製造を依頼するようになりました．

当初は，Richardson-ElectronicsによるNLブランドにおけるKT 66/7581A（中身はロシア製6L6GC/6Π3C）のように，既にそれらの国で製造されていた6L6系の球が互換品として利用されていました（写真参照）．

けれども，これらは所詮，最大定格が6L6並み



〈写真5〉GT-KT 66 HP（=KT 66 Salatov Type-2）

〈写真6〉GT-KT 66 C（=曙光電子製 KT 66）

茶色という点ではオリジナルKT 66に似てはいますが，バルブはオリジナルよりもかなり細長くて，電極の寸法や形状も大きく異なる不思議な代物でした．

それもそのはずで，この球の正体は6L6GC-Pという曙光電子製6L6シリーズの1バージョンだからなのです．

曙光電子の6L6シリーズには，同社の公式ホームページによると都合10種類（6P3P，6L6GC，6L6GC-J．6L6GC（GC-R），6L6GC-P，6L6GC-M，6L6G，6L6GA，6L6WGB）あります．※現在製造休止中や日本未上陸のものも数種類含まれています（**第1図**参照）．

6L6GC-Pは，バルブの長さや太さは6L6GC-Mとほぼ同じですが，管頂部の径を6L6GC-Rと同じ一回り小さいサイズに絞り込んだユニークな形状のバルブを採用しており，ゲッターもGC-M同様に3個に増強されています．

バルブ形状の変更に伴い，上部マイカはGC-Rと同じ径の小さいものに変更されましたが，逆に下部マイカは大型化されてサイド・マイカが増設されました．GC-MやGC-Rと比べるとGC-Pではサイド・マイカが2倍になって耐震性が向上しています．

バルブの大型化やゲッターやサイド・マイカの増強は，GC-M同様にギター・アンプにおける過酷な条件のもとでの耐久性や信頼性を向上させるための工夫と考えられますが，要の電極は従来の典型的な6L6タイプのままで，能力的には6L6並みであることには変わりなく，従来モデルよりも多少無理が効くという程度の代物でした．

話は少し横道にそれますが，PM-Componentsが展開するギター・アンプ用の自社ブランド“PM-Tubes”からは同時期に6L6GCSが発売されています．

PM-6L6GCS（写真参照）は，太型バルブと茶ベースを採用していて3個ゲッターである点では6L6GC-Mと同じですが，全長はGC-Mよりもやや短く，マイカは上下とも大型化され，サイド・マイカが2倍に増強されている点が異なります．

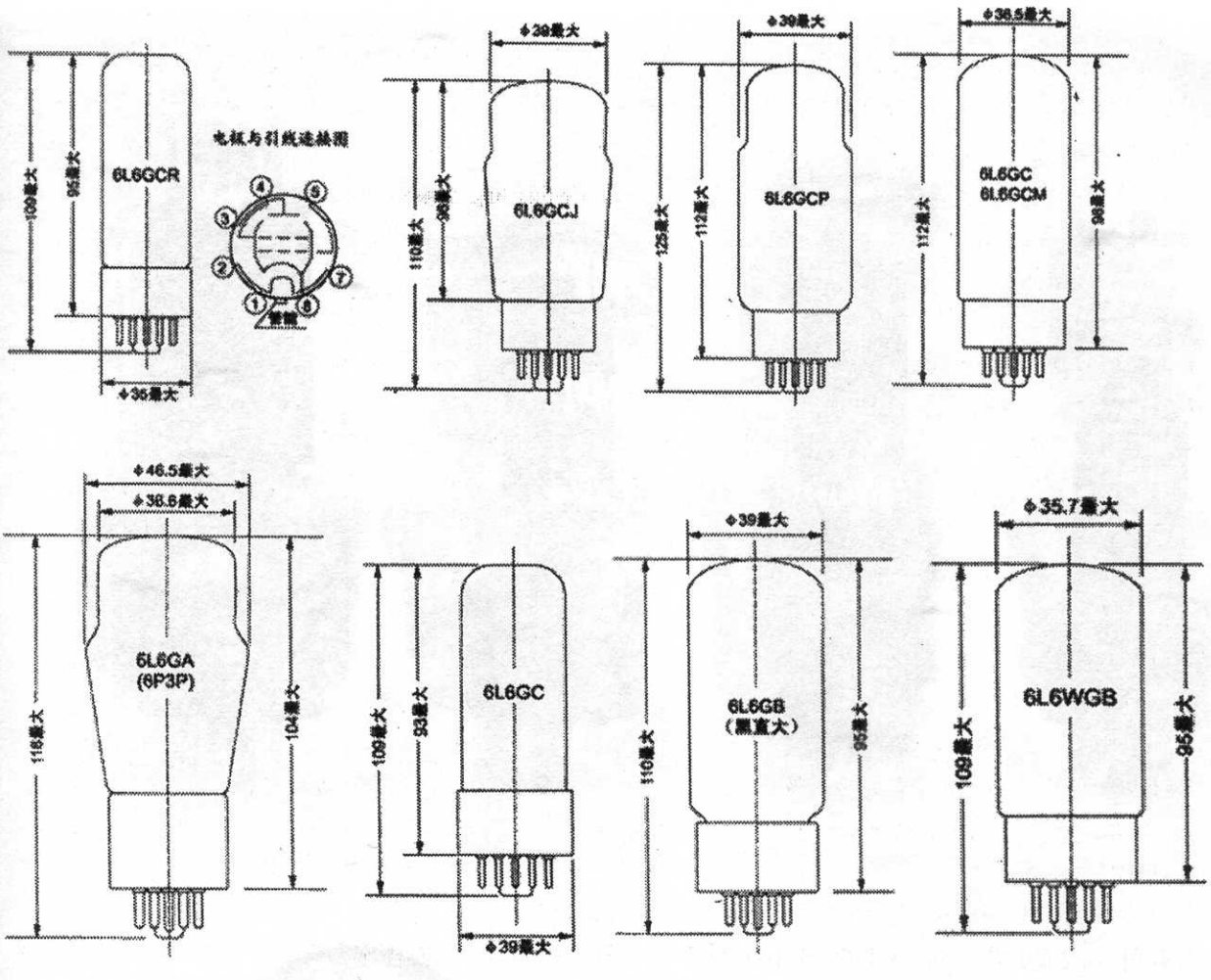
PM-Componentsでは，ギター・アンプ用6L6の供給にあたり，耐震性や耐久性の向上を製造元の曙光電子に要求していたことが伺えます．

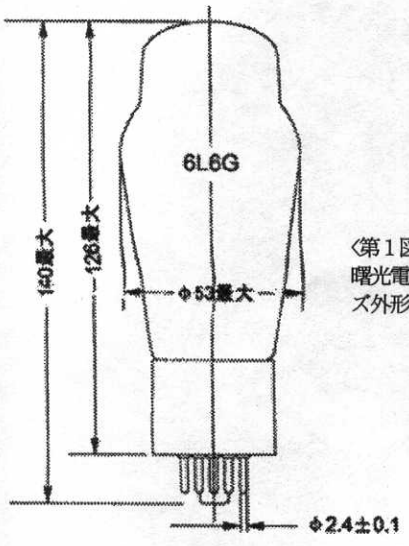
GD-KT 66（旧型）は，PM-6L6GCSをベースに，外観をオリジナルKT 66に近づけるために，特製金型によって作られた新形状のバルブを組み合わせたモデルであるとも言えます．

上記の各モデルは，バルブの形状がKT 66やその代替管の7581Aに似ているということや，ゲッターの増強やバルブの表面積の拡大によって従来の中国製6L6GCよりも多少無理が利くということでKT 66の名称が与えられているものと思われますが，スペック的にはオリジナルのレベルにはまだ到達していない状態でした．また，ヒータ定格も原型の6L6（6.3V/0.9A）と同じなので，厳密には同等管とは言えません．なお，6L6GC-MやGC-P，6L6GCSは現在では製造されていないようです．

90年代に入ると，PM-Componentsは中国の柳州（Liuzoh）と組んで，オーディオ用のより高品位な製品の開発に乗り出しました．[※柳州は曙光電子と同じく国営工場が前身で，お互いはライバル関係にありましたが，今世紀に入ってからは休業中で，現在は事実上終結状態にあります．]

そのプロジェクトでは世界初のチタン・プレート製





〈第1図〉
曙光電子製6L6シリーズ外形図

して KT 66 の特性に近づけた改造球であると言えます.

なぜこのようなユニークな球が生まれたのか？ その理由はよくわかりません. 当時の中国製 KT 66 相当管はいずれも 6L6 の改造球ばかりで, より高耐圧・高プレート損失の球が存在しなかったためではないかと思われますが, 数年後には柳州の休業に伴い KT 66 Super は製造中止となりました. [※ユーゴで開発された KT 90 は, Ei-RC が数年前から休業状態にあるため他の Ei 球同様に市場在庫が少なくなってきて価格が上昇しつつあります. また中国製は今世紀に入って柳州が休業状態になって販売終了となり入手困難ですが, 2003 年末頃にロシア Reflector 工場製の KT 90-EH が登場しました. (2005 年 5 月号参照)]

中国においては, このように試行錯誤の時期がしばらく続きましたが, 97 年になって PM-Components は, 外観や内部構造に至るまでオリジナルを徹底的にコピーした中国製 KT 66 を "Golden-Dragon" ブランドから KT 66-Retro として発表しました. (これに伴い, GD-KT 66 (旧型) は製造中止となりました.)

柳州で開発された KT 66-Retro は, ドーム天井の肩のラインがしっかりしたバルブやベースの形状はオリジナルをほぼ忠実に再現しており, ご丁寧なことに管壁には四角い枠の中に製造年とメーカーを示す記号を組み込んだ M-O. Valve 独特のマーキング (97 Z) までも再現されています. 写真のサンプルは柳州製のノーブランド品です.

写真のサンプルはそれと同じものが英国 Billingtonが展開する Thermionic ブランドから販売されたもので，このタイプの球はオーディオ誌では本邦初公開ではないかと思います．

KT 66-Saratov は，ご覧のとおり，バルブやベースの形状，内部構造や電極の形状に至るまでオリジナルに酷似しており，マイカのスリットのパターンやステム上に並べられた各リードの間隔に加えて，驚くべきことに電極接続部におけるクランク状に加工されたステム・リードの曲げ具合に至る細部まで忠実かつ徹底的に復刻しています．

最大の特徴は，オリジナルの V 字状エッジのビーム形成板を再現していることで，これは他の現代版 KT 66 のいずれもが成し得なかった快挙とも言える重要なポイントです．

唯一オリジナルと異なるのはビーム形成板が灰色（オリジナルは銀色）であることやゲッター台がロシア球独特の丸皿状であることと，ベースが黒色であることの 3 点ですが，オリジナルでも製造時期が古いものは黒色ベースなので，中国製よりも違和感はありません．

電子楽器向けの真空管商社である Groove Tubes はオリジナルへのこだわりが非常に強く，GE-6 L 6 GC が生産終了になって品薄になると，GE から購入した製造機械や金型，同じ素材を使って米国西海岸で 6 L 6 GC を製造し，Mullard 製の 12 AX 7/ECC 83 が品薄になってくると，Mullard の金型を利用して中国で 12 AX 7 を委託製造 (GT-12 AX 7 M) していますが，KT 66 も Marshall 向けに「オリジナルの復刻に徹底的にこだわった製品」として企画されたモデルです．

KT 66-Saratov は，初期型（Type-1）はオリジナルを非常に忠実に復刻していましたが，今世紀に入ると若干のアレンジが加えられ，上部マイカが端に 7 本ずつ爪を設けたタイプから逆 L 字状の板バネを 4 本設けたタイプに変わり，バルブも従来のものよりも裾を絞り込んだタイプに変わりました．（Type-2：写真のサンプルは 2002 年 5 月製）

この Type-2 は Groove Tubes では GT-KT 66 HP として発売されましたが，コスト上の問題によるものなのか？ 現在は同社の米国本社版ホームページ上のカタログからは消滅して中国製（GT-KT 66 C：C＝China）に切り替えられています．

KT 66-Saratov は，非常に魅力的な製品ですが，Groove Tubes の特注品であるため，他に市場に出回った量も少なく，入手困難なのが悔やまれます．私も数年前に秋葉原で 2002 年製のノーブランド品を入手したのが最後の機会でした．

けれども，欧米では Harma-STR KT 66 や KT 66-Saratov としてまだ購入可能なようです．

また，Groove Tubes 日本支社のホームページ上のカタログには GT-KT 66 HP は現行商品して掲載されているので，まだ入手可能のようです．（2007 年 12 月現在）

さて，前置きが非常に長くなってしまいましたが，次回は本題である J/J-KT 66 の概要についてお伝えしたいと思います．

先月号の写真でお気付きのとおり，J/J-KT 66 はオリジナルとはかなりイメージが異なりますが，他社製品にはない独特の解釈が加えられたユニークなモデルです．

（つづく）

〈第 2 図〉 GT-KT 66 アメリカの雑誌広告